
欲求フマンはテキである!?

格孤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

欲求フマンはテキである!?

【Nコード】

N3142W

【作者名】

格孤

【あらすじ】

私は、普通よりも身長が小さいせいで、小さい頃から変質者、変態…etc、総じて変人によく襲われていた。

何が起きててもあまり動じないような、「その年の女の子にしては、性格が妙に落ち着きすぎている変な娘」なんて周りに言われちゃうほどの私。

そんな私の前に、まさかの宇宙生物襲来！？

まさに今、宇宙生物の手に落ちようとしているその時、ある男の子に命を助けてもらってしまっ。

しかも、「命を助けた礼に、僕の仕事を手伝って」と持ちかけられて…

人の「欲求フマン」を餌に地球によってくる宇宙生物を、その人の欲求を満たすことによって撃退する。

見た目さわやかけど腹黒な先輩と私とで繰り広げられる、不可思議で非日常的な物語が、今、始まる…っ。

っ…あらすじってこんな感じでいいのかな？

う、うーん…まあとりあえず、よろしくお願いします。

プロローグ（前書き）

どうもこんにちは、またはこんばんは、格孤かっこと申します。
「格好いいくらい孤独な存在」を略してこつ名付けました。

さて、この話は私的に、私自身の願望を書きたいと思い書き始めました。

拙い文章ですみません。

段落の付け方や、行の開け方なんかは、全て雰囲気で行っているの
で、適当です。

その辺ご了承下さい。

一週間で更新を心がけたいたのですが、忙しくて書けないときは…許
してやって下さい。

めげずに完結させたいのですが、あまりにも展開がひどいと作者が
思ったら、凍結させる…

かも

…しれません。

長文失礼しました。では、本編をどうぞ。

プロローグ

17世紀ごろのイングランドの哲学者、トーマス・ホッブズは

「人間の欲望は放っておくと、万人の万人に対する闘争が起こる。そのため、自身の持つ自然権をただ一人の主権者に委ねる事を契約しろ。」

とまあ大体こんな感じでこう言った。

『ただ一人の主権者』とした政府の名前を、『リヴァイアサン』たる怪物にしたのには何か深い理由があるんだろうけど、そんなことはまだまだ高校入りたての私にはわからないわけだよ。

授業でいくらそのことに関して自分の思うことをまとめるだなんだと言われたところで、さっぱりわからないで適当な答えを書いて提出になるのが関の山だろっ。

しかしホッブズってのは、歴史に名を残しただけある…
その言葉に間違いはなかった！

…その言葉に関して、深く考えないと自分の身が危なくなるほどの状況に陥ることになったのは、
大体今から1ヶ月ちょっと前ぐらいの、まだ若干冬の寒さが残る、
初春のあの日のことだったー…

プロローグ（後書き）

ホッブズの言葉は、私なりの解釈でまとめたものですので、本当にそうやって言っていたわけではありませんよ。

解釈が間違っていたとしても突っ込まない方向で…お願いします。
ちなみに、っぽくない言い回しですが、主人公は女の子ですw

いろいろ不可解な点等ありますが、これからよろしくお願ひします！

第1話：初登校日（前書き）

前話投稿からちょうど1週間ですね。

時間に余裕があったので、全然間に合いました。
今後もこうでありたいと思っています。

さて、プロローグのあとがきでも言いました。

しつこいようですが、誤解なさらぬよう、先に言っておきます。

…主人公は、女の子でございます（笑）

誤字、脱字などは、一応確かめてはいますが発見してしまった場合は…

そっとしておいてやってくださると幸いです…

では、本編をどうぞ〜

第1話：初登校日

朝、目覚ましの音で目が覚める。

なかなか起きない。

やっと起き、時計をみる。

「ああーっもうこんな時間！急がなきゃ！今日から高校生なのに
いーっ！」

ドタドタと慌ただしく、食パンをくわえながら「いつてきまーす
！」

そしてなにかしら忘れ物するー…

…とまあ、女子高生が主人公の話って言ったら、こんな感じのがベ
タでいいんだろうね。

ところが残念。

私はそんなキャラじゃない！

朝は登校予定時間よりも1時間半も早く起きたし、昨日の夜にきち
んと持って行くものの用意はして、今朝さらにチェックもしたから
忘れ物なんてない。

付け加えさせてもらうと、朝ご飯は米だったし、何もないとこ
ろでつまづくってというのは、小6ぐらいの時以来なかったはずだ。

今日は高校の入学式の日。…の朝6:00ちょっと過ぎぐらい。

「えーっと…あと用意するものは…制服を着るくらいかなー…っと」
自分の部屋で、新しい学校の制服をパツと持ち上げてみる。

うーん、これがこれから3年間着ることになる制服かあ…

特に他の高校のセーラー服となんの変わりもない、リボンとかスカ
ートとかが若干青っぽいかな？ってだけのふつつーのセーラー服だ
けど、なんとなく特別な物のような気がしてしまうのは、こんな私
でもやっぱり、少しぐらいは新しい学校生活への期待で胸を膨らま
せているせいなのかな？

…まだ一回ぐらいしか着てないと思う。

ほこりがついてると気になって取ってしまうくらい綺麗だ。

服を持ったまま腕を前に伸ばす。胸の高さまで持ち上げたセーラー
服が、窓から入る日光で光る。

「はぁー綺麗だなあー…」

私のうちはごく普通の2階建ての一軒家だ。

普通に住宅街の中にある。

別段大きくもないし小さくもない。

…いや、普通よりはちょっと小さいかな。

ちなみに私の部屋は2階にある。

セーラー服は、着てみると自分より少しだけ大きい気がした。

成長したらぴつたりになるのかな…

でも私、中1の頃から2cmぐらいしか身長変わってないんだけど…
神様、あと8cmでいいからちようだいっ！

…神の存在なんて信じてないんだけどね。

鏡の前に立って自分を見してみる。

服装こそ高校のものだけど、やっぱりちょっと前まで中学生だったからか、いつもとなんにも変わらない、いつもの私が立っていた。

「うわーやっぱり子供っぽいなあ…高校生っぽくない。」

肩よりちょっと長いくらいか…そのくらい伸ばした髪を結ぶ。

あ…そうだ…

どうせ知ってる人誰もいないだろうから、髪型でもイメージチェンジしてみるかな…？

最終的にいつもと同じポニーテールをなびかせ、ペダルをこぐ。
うん。まあこれが一番落ち着くよね。

学校は自転車で15分くらいのところにある。まあ若干遠い。

学校に向かう途中、同じ学校の制服をきた子を全然見かけなかった

から、
この時間で合ってるよね…？
って、何回も時計確認しちゃったけど、どうやら合ってたみたいだ。
よかった。

校門のところには、先生だか生徒だかがたくさん並んでいた。

「…！」

う、わ、わ、わぁーやめてくれーっ…

周りには私一人しかいないのに…
全員に揃って「おはようございます！」って言われて…

こ、困るなあ…私そんなテンション高いキャラじゃないんだよぉ…

「お、おはようございます…！」

元気ないな私！

くそー恥ずかしい…
顔が赤くなってる気がする。

顔を隠すようにしてそそくさと昇降口へ急いだ。

第1話：初登校日（後書き）

第1話目、ここまで読んで下さってありがとうございます。

まだ1話目で、皆さんはこの話を読み始めたばかりだということにも
かわらず、「最初からいきなりなんだ！」って感じでしたね。
最初からいきなり飛ばしすぎました。許してください。これからは
文章力の向上に努めたいと思いますので。

まだこの物語は始まったばかりで、主人公の名前すら出てきていま
せん。（苦笑）
話的にも、全然進んでいませんね。主人公がとある高校に入学する
って話だけです。

私的には今回の話はちょっと長かったか、という感じです。
つまりこれからのお話は、一話一話短くして、皆様が気軽に読みや
すいようにできたらいいな、と考えて作っています。

長くなってしまいました。ではまた、2話目でお会いできたら幸い
です。

第2話：入学式（前書き）

どうも、格孤です。

最初1週間で更新と言ってたのですが、最初のほうすぎて話が進んでいなさすぎてなにも起こっていないのに、読者の方を1週間もお待たせするのはどうなのかと思い、やはり1週間以内更新としたいと思います。

よろしくお願いします。

では、本編へお進みください…

第2話：入学式

案内の先輩の生徒に促され、体育館へ向かう。

「…おつきい体育館だなあ…」

体育館の手前でなんとなくつぶやいてみる。

まあそんなに大きいわけではないのだが、目新しいし、中学の体育館よりは大きいので、そう思った。

入学式の風景は、まあよく覚えていないが中学の頃と多分変わりはなく、他の高校の入学式なんてみたこともないがまあおそらく普通の、高等学校の入学式だったろうと思う。

長々しい校長の挨拶やらがあったのだが、そこらへんは省略。

なぜこう、校長というのは、今世間で起こっているニュースを取り上げてそれを自分勝手に話した拳句、そこから無理矢理生徒たちに結びつけて締めくくりたがるのだろうね？

…ちなみにこの高校のレベルはどの位かと言うと…まあこの私が合格できたぐらいだからそんなに高いわけでもなくて、体育館を見回すとクラスに3人ぐらいは悪そうなやつがいますよーってぐらいかな…？

入学式が終わると、クラス別で教室に移動になった。

まあそこで自己紹介やらこれからの話やらあったんだけど、これも省略させてもらう。

『やっぱりクラスには知ってる友達は一人もいなかった。』まあそのくらいは言っておこうか。

さてまあ、入学式付近の、新しい空間で始まるこれからの学校生活に若干緊張したり高揚したりしている私のせわしなく事細かい入学式の状況説明はこの辺までにしておこう…。

こんなくだらないことをいくら書いたところで、放課後に出会ったあの出来事のインパクトに比べたら、

クラスのみんなの前で自己紹介の時に自分の名前を噛んでしまい赤っ恥をかいたことや、

部活検討のために校内を歩き回ってた時にロリコンっぽい男子の先輩方にちっちゃいちっちゃいと頭をいじくり回されたことなどは、まさに宇宙空間に放り出されたミジンコのごとく小さな出来事にすぎないんだろっからね。

…言い回しがくどいとはよく言われるよ。

そう。前にも言ったとおり、私は神様の存在なんて信じちゃいない。さらにいえば、宇宙人はもとより、幽霊、超能力、妖怪…あとなんかいるかな？そこらへんの、科学で証明できていない奴らは全部信じない質だったんだだけ。

あの出来事のせいでこの考えを検討しなければならなくなっただ

|
|
|
⋮

第2話：入学式（後書き）

お読みくださってありがとうございます。

また短いですね…（苦笑）

今回はサブタイトルの通り、入学式があったただけでした。

次回、『この考えを検討しなければならなくなった』原因となる人物がついに登場します！

第3話：変人との出会い（前書き）

どうも、格孤です。

サブタイトルの通り、『変な人』（？）に出会います。

ではどうぞ、本編へ。

第3話：変人との出会い

学校からの帰り道…。

私は自転車登校なのだけでも、自転車を置くスペースがあいにく高校の敷地内にはないらしく、登下校時は学校から自転車置き場までの5分ほどの道のりを歩かなければならないらしい。

そう、その5分ちよつとの間になにが起ころうかなど考えもしておらず、完全に油断していたのだ。

突然後ろから男の人に「ねえ君！」と声をかけられた時は驚いた。

昔から体つきが小さかったので、よく痴漢や変質者など…総じて変人達、にはよく声をかけられていた。

ただ最初は怖くて怖くて仕方がなかった変人達だけど、さすがに小学校高学年ぐらいいまでになると、頻繁に声をかけられる事が日常のようになってすっかり慣れてしまい、

「この年のこの身長の子にしては性格が妙に落ち着きすぎている変な娘」

と周囲から言われるような私が出来上がっていた。

…不意を突かれた事で「ひゃいっ!？」…と、私らしくもない声をあげて驚いてしまったが、すぐにいつもの落ち着きを取り戻して

状況を見てみた。

目の前には私よりもはるかに背の大きい、…多分うちの学校の男子の…先輩？…が、私を見下ろして立っていた。

「…なんですか？」

落ち着いた表情を作って、一応返事はしてみる。

昔、変人さんの呼びかけ無視したらえらい目にあつた事があるからなあ…。変な感じだったら即効警察を呼んでやるよ。

ポケットに手を入れたまま、ケータイを握り締める。

顔はそのまま、視線だけ上を向いているから、睨んでるように見えるかもしれない…

しかし、男子校生はニコリと笑って、

「あ、いや、ごめん。いきなりだったから驚かせちゃったね。」

と、さわやかに答えた。

…おや？どうやら普通の人のようだ…？
よかった…

「…ん…？」

よく見ると、それなりに整った顔立ちをしている…。かつこいといふより、綺麗な人って感じかな。すらっと背が高く、体つきは細いけど、なんか力がありそうな…黒くてストレートな髪は少しだけ長い感じか。愛想が良くて、笑うとなんか…猫みたいだな。

…へえ…イケメンってほんとに存在してるんだなあ…TVの中と漫画やアニメ以外で始めて見たよ。

さわやかな雰囲気の見た目にすっかり惑わされ、自然と携帯を持つ手と警戒心が緩まる。

「いえいえ。それで、なんの御用ですか？」

まあ…悪い人ではなさそうな気がする…

「いや、ごめんね。えっと…」

「はい。なんでしょう？」

言葉にするのをためらっている感じだったので、こっちから促してみる。

…しかし彼の口から出た言葉は、思いも寄らない言葉だった。

「…悪い事は言わないから、ちょっと僕と一緒に来てくれるかな？」

……。

「…はい？」

にこやかに解き放った言葉は、もう完全にアウトな言葉だった。

「詳しい事はあとで話すから、とりあえず僕について来てよ。でないとまずいことになりかねないからさ…。って、あれ？」

そんな言葉が聞こえた気がした。彼が「あれ？」って言った頃には、私はもう走り去った後だった。

くっくく完全に見た目に騙されてたっ！あの人もそっち側の人間だったか！

『まずい事』って一体なんなんだよっ！

「もお！」とプンスカしながら、私は自転車置き場へ急いだ。

第3話：変人との出会い（後書き）

第3話、お読みくださってありがとうございます。

主人公は、変態に襲われる被害によく会っただけですね。経験豊富なようです（笑）

さて、『まずいことになりかねない…』謎なことを言い残して去る（去ったのは主人公のほうだけど）という男が登場しました。はたしてこの男の正体とは！？

また、この男の言う『まずいこと』とは一体！？

次回、ついに事件が起こり始めます。お楽しみに！

第4話：事件発生（前書き）

どうも、格孤でございます。

やっところ話が進み始めます。

ふうーやっとか…

…なんて思いながらも、読んでやってください。

では、本編どうぞ！

第4話：事件発生

「はあっ…はあっ…うっ…ッ」

…もうさすがに追って来てはいなかった。

一生懸命走りすぎたせいか、とても疲れたので、近くの縁石に腰を下ろした。

スカートをはいてて縁石に座ると、それで今まで2回ぐらい変態に盗撮されたことがある…。なにを？って言われても…答えられませんっ

「ふうー…ひいー…っ…！」

久しぶりにこんなに走ったよ…。

なんであんなに一生懸命走っちゃったんだ？見た目さわやかな男子に声かけられて、なにか期待しちゃったのか？それを裏切られたからやけくそで走っちゃったみたいな…

うっくそっ！欲求不満か！

恋なんてしたことないからか！？

前にも言ったとおり、昔から体がごちんまりしてたから、そういうのが好きな人たちもいたけど、気に入られるくらいで特になにがあったわけでもなかった。

…まあ、男の怖さは誰よりも知ってるつもりだ。だからさっき、男の子に声かけられたぐらいで異常なぐらい警戒してたんだ。それら全て忘れて、そう簡単に恋なんてできるか！

でも…うーん恋か…。

さっきの人。綺麗な人だったんだけどなあ…

てゆーか、私はメガネかけてる冷静な雰囲気の人が好みだし…
…って！なに自分の妄想で赤くなっちゃってんの！

ああ〜もうやめだ！

呼吸もだいぶ落ち着いたし、パツと立ち上がり、再び自転車置き場に向かうため、前に一歩足を踏み出すー…

ズドンツ！！

と同時に、後ろから大きな音がした。

今、私が座っていた縁石の上に何か重たいものが落っこちて来たよ
うだ……

と、振り返ると

「……ツ！？」

蛇！？

いや熊！？

おっ大きい！！

そこには、まさにパッと見、誰もがそう思うだろう生物が、転がっていた。

第4話：事件発生（後書き）

第4話、お読みくださってありがとうございます。

やっと事件が発生しましたね。

またとても短いですが…（苦笑）

主人公の後ろに落っこちてきた生物の正体とは！？

次回、このお話の要となる生物が、主人公に襲いかかる！

主人公大ピンチにつきパニクリ必至！

乞うご期待！

次回も見てくださいね！

格孤でした！

第5話・混乱（前書き）

いらっしやいませ、格孤です。

どうやらほんのちょっとR15（？）かもしれない場面があります。
ご了承ください。

さあついに、事件が起き始めました。

主人公は一体どうなってしまうのか？

答えは、本編でどうぞ。

第5話：混乱

突然目の前に現れた生物は、

蛇のように長く、しかし熊のような体つきをしていて…あ、熊に蛇のような長い尻尾が生えて、熊の首から頭にかけて、ビヨンと前に伸びたみたいなの…

でも体毛はなく表面はツルツルでクラゲのような感じだ。

しかも体長3mはあるだろうか、とっても大きい。

「…ど、どこから落っこちてきたのこれ…!!?」

とりあえず上を見上げて見る。

「!!」

なんと、私の目の前にある5階建てぐらいのマンションの屋上の柵が、破り壊されているではないか。

「…も、もしかして、あ、あんな所から!?!」

……………!

…あ、危なかった…もし今、歩き出そうと立ち上がっていなければ、この縁石ごとぺっちゃんこになっていたところだった…

この生物のことを大丈夫か、なんて気にかけてる余裕は今の私にはない。なんせ危うく死ぬところだったんだ。

「……はっ……はあっ、はあっ……!……」

…呼吸が乱れる。

怖い目には今まで何度も会ってきたから、こういう事が起こったら、常人よりは冷静な対応ができると思っていた。
それなのに……

「……う……」

へなへなと地面に座り込んでしまう。

「危うく死ぬところだった」と考えると、安堵からか目の前の見たこともない生物への恐怖感からか、自然と足腰の力が抜けてしまう。

何でだろう、目の前にいる見たこともない生物は、高いところから落ちてきたために倒れこんで動かなくなっているのに、なんとなく恐怖感を感じる。

「ウエアアアア……!……!」

「ひゃっ……!……?」

突然その生物が頭だけを起こして唸り声をあげたため、思わずとっさに耳を塞ぎ、座ったまま後ずさりしてしまった。

…こんな声聞いたこともないよおっ……!……!……!

その生物は、力が抜けたようにズドンと頭を地面へ落とす。

…何なの、この生物は…？何でこんな住宅街にいるの…！？なんであんなところから落ちてきたのに生きてるの…！？

いろいろな考えが頭をめぐり、ダメだ、ついにパニック状態になってきた。

今まで…初めての高校だからって、ワクワクしたりしてたのに…自己紹介で噛んじゃったりしてたのに…変な人に絡まれたり、恋がどうとか考えたり、妄想したりしてたのに…普通の日常だったのに…ッ！！
なにこれ！いきなり出てきて…私の日常を壊さないでよおっ！

「…い…や、だ…ッ！！」

一体なんなのこれ！？

こっちは動けないんだから、そっちが動いてよ…！
なんで周りに人が誰もいないの…！
怖い…怖い…！怖い…っ！！

「ブオオオオオオオ！！」

「ひっ…！！…い…」

叫び声をあげたと思うと、倒れた状態から、まるで下げた頭をあげるブラキオサウルスのように、ゆっくりと、それでも勢いよく立ち上がった。

まるで、屋上から落下してきて、さっきまで苦しそうにうめいていたのが嘘だったかのよう。

立ち上がるととても大きく…まさに…怪物だ。

…そのまま怪物は、私の方を見た。

「いつ…」

もう声がほとんど出てない。

恐怖で絞り出した声も、かすれている。呼吸が正常にできていないんだ…

怪物の目は、蛇や熊のように鋭い獣の目ではなく、顔の内部は眼球が大半を占めてるんじゃないかってくらい大きくて、まんまるで、白目は無く真っ黒で、まっすぐ私のことしか見ていない、それでいてなにも考えていないような…
生気が全く感じられない目だった。

…しばらく怪物と私は硬直していた。ただ私の方は怯えて絶えず体が震えていたが、怪物の方はピクリとも動かずただただ私を見ていた。

その吸い込まれそうな目にじっと見つめられると、時間が流れるのがとても遅く感じる。…もう何時間も経ったみたいに…。

「あ…れ…?」

すると突然、とてつもない眠気が襲ってきた。な、なんでいきなり、こんな…!?

寝ちゃダメだー

…そんな気がする。寝たら取り返しのつかないことになりそうな…

しかし無情にも、眠気は次第に強くなっていき、くらっと景色が揺れたかと思うとー…

地面にはたつと倒れてしまう。

「う…く…」

精一杯眠気と戦うが、まぶたはどんどん重くなっていくー…

ポコッ！

…突然、怪物の背中が膨らんで、泡が割れるようにその膨らみが割れたと思ったら、背中からとても細い、ヒドラのような触手のようなものが寝ている私に向かって生えてきた。

…なんだ…これ…まずい…起きなきゃ…。

しかし襲ってくる眠気がそれを許さない。

そうしてるうちに、5本ぐらいの触手が私の体に巻きついていき、軽々と空中に持ち上げられる。

私…体重は38キロぐらいで軽い方だけど、その細いものたったの5本で私の体が持ち上げられるわけがないんだけどなあ…あ…意識が…

？

「ひあっ…ちよっ…」

どっ…ど、どこ触ってんの！？

触手が足と足の間まで入り込んできやがったっ…。

今まで出会ってきた変人たちの中でも、指折りの大胆さだなっ…。
一瞬眠気が飛んだよ。

あ…でも…すぐまた眠く…なっ…

…も…もう…ダメだ…

………

！？

諦めかけたそのとき、突然体が地面に叩き落とされた。

視界がぼんやりしててよく見えなかったけど、どうやら誰かが、私の体にまわりついていて触手を切り裂いたらしい。

…そのあとのことはもう覚えていない。眠気に負けて眠ってしまったからだ。…ただ、眠りに落ちる寸前、その人は、倒れている私にこう言った。

「全く、まずいことになってちゃんとお警告したじゃないか…」

第5話：混乱（後書き）

第5話、お読みくださりありがとうございます。

今回はいつもよりちょっと長くなった気がします。

やっとですね。

物語が動き始めました。

まだまだ最初ですが、これからも温かい目で見守ってけると、とてもうれしいです。

次回！

なんと、ついに主人公の名前が判明します！（苦笑）

眠りに落ちる直前に聞いたあの声の主は…！？

そして、あのセリフはまさか…！？

舞台はその声の主の家です。

乞うご期待です！

次回も見てくださいとうれしいです

ではまた、第6話でお会いしましょう。

格孤でした。

第6話・目覚め（前書き）

どうも、おさかなくわえた格孤です。

前回のあとがきでも言いましたが、今回、主人公の名前が判明します。

ついでに、主人公を助けてくれた謎の彼の正体 & amp・名前も判明します。

同時に、あの怪物の正体もちょっとだけ判明します。

それでは、本編をお読みください。

第6話・目覚め

「う…うー…？ここは…」

どうやらあのあと、本当に眠ってしまったようだ。

寝ている間に誰かが運んでくれたのか、起きると私はベッドの上に寝ていた。

…ん？ベッド…？

って……

ここは…ここは…

あれ…？

…どこだ？

どう見ても、ここは学校の保健室とか、運び込まれた時にくるような場所ではなく、普通のマンションの一室なのだ。

…あ…あれかな？眠っちゃう直前に聞いたあの声の主の家かな…？

それにしても、あのあと何が起こったんだろう。

いつの間にか寝ちゃってたから、わからないけど。

というか…あの突然の眠気は一体なんだったんだろう…？
……。

…あのあと…あの怪物に対して、私を助けてくれたあの声の主は、
どんな行動をとったんだろう。

やっぱり逃げたのかな…。ん？すると、私を連れて？……………。

いや、それよりも、あの怪物は一体なんだっただろうってほうが
気になる。

動物園から逃げ出した動物…っていう仮説で納得するには、不可解
な点が多すぎる。

…まさか、未確認生物や妖怪、モンスターの類じゃあるまいし…

……………。

はっ！

そういえば、あの声の主、なにか重要なことを言ってた気が…
あ、あれ？なんだっけ？

う、うーん…記憶がハッキリしてなくて、ほとんど覚えてな…

ガチャッ

と、突然ドアの開く音がした。

と同時に部屋に入って来たのは…

「おや？目が覚めたんだね。」

にっこりと笑っていて、愛想の良さそうな好青年だった。

あれ…この人どっかで……………

「あー！うああ！？あなたはさっきの…」

…いきなり声をかけて来た変態じゃないかー！

ああ、そうだ、眠っちゃう直前に聞いた声は、確かにこの人だった！

「覚えていてくれたんだね…ありがとう。」

持ってきたおぼんをテーブルの上に置き、床の座布団に座りながらクスリと笑う。

ああ〜つやめてえ〜！さつきもその笑顔に騙されたんだから〜っ！

「ね！あなたは誰？なんで私はここに運ばれたの！と言うか、ここはどこ！？」

甘い笑みに若干ときめきかけの自分の本能を振り払うように、大きな声で質問をまくし立てる。

すると彼は、笑顔のまま、おぼんの上に置いてあるジュースの入ったコップとストローを持つと、私の方に差し出してきた。

「はい。ずっと寝てたからのど乾いたでしょ？オレンジジュースは大丈夫？」

ちよつと…聞いているのか…？

ちよつと受け取るのをためらったが、そんな笑顔で私に気を使いなから渡されたら、断れない…。

「…うん。大丈夫…ありがとう。…」

ベッドの上に座りながら両手を伸ばし、それを受け取った。

確かにのど乾いてたから、ちょうどいいし……。
いや、それより……

「…え、そんなにずっと寝てたの私…?」

「うん。そうだね。僕がこの部屋に運んでから、大体4時間ぐらいは寝てたかな。」

うげっ!?

「よ、4時間?そんなに…?」

見ると、窓の外はもう真っ暗だ…。

うわあ…お母さん心配してるだろうなあ…

また変な人に捕まったんじゃないかって。

…まあ、今のところそれも間違っていないけど…。

「うん。…君、寝顔がとっても可愛くてね?思わず見入っちゃってたよ…」

……ん?寝顔が…

…可愛い?…

…

…え、…ええっ!?

な、なんだったって!?

いきなりなに!?!えっと、あ、とりあえず、なんだ、

「っ…ありがとう…?」

「いやいやあ、こちらこそ、あの気持ち悪い生物を見たあとの十分な目の保養になったよ。ありがとう。」

「あ……」

その言葉を聞いて、記憶にあの不気味な二つの目が蘇ってきた。

「う……」

よろりと倒れそうになったが、私のところに素早く移動した彼に支えられる。

「……大丈夫？」

「……う……うん……ありがとう……」

運良く手に持っていたオレンジジュースはこぼれなかった。

……ああ……やっぱりあれは、夢じゃ無かったんだ……。

……本当になんだったんだろう……あの怪物は……

……なんでこの人は……あの出来事がさぞ当たり前かのように、冗談みたいなノリで話せるんだろう……。

そんな私の考えを察したのか、元の場所に戻りながら、彼は話し始めた。

「……ごめんね。いきなりこんなことに巻き込んだじゃって……さっきの質問に答えるよ。僕は相馬正人。君と同じ高校の、学年は君より一個上。……それと、ここは僕の家だ。一人暮らしだから、気兼ねはいらないよ。」

そこで、一旦、言葉を切る。

…『巻き込んだじゃって』って…それはつまり、自分は、私みたいに
なにも知らない被害者ではない、っていうことか…？

…てゆか、やっぱり先輩だったのか。だったらタメ口はまずいな。

『一人暮らし』という単語に若干反応しつつ、ストローでジュース
をすすりながら話の続きを待つ。

ズズズズ…

「…それで、君をここに運んだ理由だったね…。…君の名前は、管
野ゆり、だよな？」

「！？…はい…。」

…なんで、今日入学したばかりの私の名前を知っているの？やっ
ぱりこの人、ただの変態なんじゃ…

「君には、あの生物が見えたんだよね？」

「！………」

…また出た。この人、あの怪物について何か知ってるのか…？

「…はい。えっと、相馬…先輩。」

「ん？相馬でいいのに。なに？」

「相馬先輩は、あの生物に関してなにか知っているんですか？」

真剣な顔で先輩の顔を見つめる。すると…

「うん。知ってるよ。」

「……………!……………」

…なんで知ってるの…?この人、なんなの?

「なら…教えてください。あれは…一体なんなんですか…?」

「……………」

一瞬、喋る事をためらうようなそぶりを見せた。

「…言っても信じないと思うよ?」

困ったような顔で笑いかけてくる。

「…構いません。知りたいんです。」

…長い沈黙が流れる…。

そして。

「…まあ、いつか…どうせ教えることになるし…」

「え…?今、なんか…言いましたか?」

先輩がボソッとつぶやいたが、なんだろう。聞こえなかった…

続いてその口から出た言葉は、意外な言葉だった。

「あれは…宇宙生物だ。」

第6話・目覚め（後書き）

第6話目、お読みくださりありがとうございます。

主人公は、菅野ゆりという名前だそうです。

助けてくれた変態もどきは、相馬正人というそうです。

あの怪物は、宇宙生物…！？と、いうそうです…

今回は、もうちょっと詳しくこのお話について掘り下げます。
そして、このお話の意図が判明する回です。

あ、つまり、この話はこういう話なのか！と。

…ついでに、ゆりちゃんがドキドキします。

ぜひ、次回も読んでやってください！

それでは、格孤でした。

第7話：説明、そして…（前書き）

どうも、格孤です。

前回までのあらすじ…

主人公の菅野ゆりは、高校の入学式の帰り道で、でっかい怪物に襲われる。今は、その場を助けてくれた相馬正人先輩の家でオレンジジュースを飲んでいます。

宇宙生物とはなんなのか？

また、相馬先輩は何者なのか？

…本編を、どうぞ！

第7話：説明、そして…

「あれは…宇宙生物だ。」

「…え…？」

…え、え、な、なんて？

「まあ、宇宙人って呼んでも大丈夫だと思うけど、少なくとも人の形ではないから、僕がそう名付けたんだ。」

「…う、宇宙…人…？」

ま、まさか…そうくるとは。

「…うん。そう。ほら、やっぱり信じられないでしょ？」

「い、いえ…えっと…」

まあ、そりゃあ信じられないに決まってる。しかし、それはちょっと前の私だったら、の話だ。

ちょっと前の私だったら。突然変態未遂の男にこんな話をされたら、絶対に信じなかっただろう。

…だけど、少なからず私は実際に、地球上には存在してそうにない怪物に襲われそうになるという経験をしている。

あれがなんなのか、って言われて、「宇宙人だ」って言われても、特に私は違和感は抱かないはずだ。なんせあんな正体不明の生物だ。なんと言われようが、事情を知っている者からの情報を信じてしまうのは当然の事だろう？

「…え、ほ、本当に…宇宙人、なんですか？」

「うん…あ、いや、確証はないよ。ただ、地球上に存在していない生物だったらしいから、勝手に宇宙生物って呼んでるんだ。」

「え…へえ…」

それは、まあ…そうだろう。あんなものが地球にいるなんて考えもつかない。…じゃあ、本当に宇宙人なのか…？
つて、あれ？

「え…『らしい』…とは？」

一瞬、相馬先輩の顔が曇る。
え？聞いちゃいけない質問だった？
しかしすぐまた、元の優しい表情に戻る。

「…それは、話をもうちよっと進めてから話す事にしても、いいかな？」

それは…まだ話は長くなるって意味かな？

「あ、はい。構いません。ぜんぜん…。」

そう答えると、またニコリと笑う。

「えつと、さっきの話に戻るよ。…そう、ゆりちゃんをここまで運んできた理由だったよね。」

「ええっ！？ゆりちゃ…あ、ひゃいつ！お願いしますっ！」

な、なんでいきなり名前で！？び、びつくりしたな、ゆ、ゆりちゃんなんて…小学校以来だよ…

この人といると、無駄に心臓に悪い事が起こるなあ…もう…

「悪いけど、僕ってそんなに親切な人じゃなくてさ、もしも襲われたのが君じゃなかったら、多分助けたりはしなかったと思う。助けたとしてもここまで運んできたりはしなかっただろうね。公園のベンチに寝かせておくとか…」

「え、そ、そうなんですか？…」

えっ…つまり、それは…どういう…？

「つまりね、君だからこそ助けたんだよ。人助けのためとかじゃなくて、君の存在
自体が大切だったんだ。」

…ふえ？

…え、ええええええつええええ！？

えと、え、それって、え、つまり、こ、コクっ、告白…！？

え、なんで！？なんでいきなり！？え、ちよっとまって、落ち着け私ーっ…！！

「え…あ…あの…なんで、私、なんですか…？え…つと、さっき…
会ったばかり、なのに、えつと、あの…その…」

あれえー！？ダメだ、頭が混乱して…うまく言葉が出てこな…

「会ったばかりもなにも関係ないよ。君は、あの生物を見る事ができたんだ。理由なんかそれだけで十分だよ！」

……。

…うん？

またあの怪物が関係してくるのか？あれ、なんかおかしいぞ？え、
もしかして、…なにか勘違いしてる？私。

「えつと…それは一体どういう…」

…意味ですか？

「えーつとね。話すと少し長くなるんだけど、とても簡単に言つと
…」

相馬先輩は、しばらく手をあごに当てて考え、やがて顔をあげると
こう言った。

「えつと、実は宇宙生物っていうのは、僕たちが普段暮らしている
世界には視覚化されていないんだ。それを見る事ができる才能を持
った人は、世界中を見渡しても少ししかいないらしい。僕にはその
才能がないから、特殊なガラスを通してじゃないとどこにいるのか
わからないんだ。」

…はい？
いきなり難しい話を始めたけど…

「…それは、私だからこそ助けたって事になにか関係があるんですか…？」

「ん？だって君は、あの生物が見えたんだらう？」

「え…？は…はい。それが…なんなんですか？」

「つまり君は、世界中を見渡してもなかなかいない、宇宙生物を肉眼で見る事ができる才能を持った、非常に貴重な存在なんだよ！」

先輩の目は、興奮からか？微妙に輝いていた。

「……………」

ああ、なるほど。

…だから、つまり、どういうこと…？

「宇宙生物っていうのは、地球にいたとしてもまずい存在なんだ。人の目に見えないから、さっきみたいに物が壊れたりしても、原因がわからなくなってしまっからね。」

「……………確かに…そうですね。」

なにを言ってるのこの人…話が見えない…

って、あ、まさか…？

「…それで、それを撃退するのが僕の仕事。でも、普段見えないかなかなか見つからなくてね…誰かうってつけの人材を探してたんだ。」

話をそこで一旦切り、ちらりとこちらに視線を向ける。

そこまで言われれば後のことは誰だって予想がつく。

…つまり、この人は、私だからこそ助けたっていうのは、私がその『うってつけの人材』だったからだと言いたいわけだ…
私をここまで連れて来たっていうのはつまり…

…そんな風に考えている私を見て、私の考えを悟ったのか、ニッコリと笑って、

「……………飲み込みが早くて助かるよ。」

…と、言った。

「僕の仕事を手伝ってくれないか？」

第7話：説明、そして…（後書き）

第7話、お読みくださりありがとうございます。

今回は、宇宙生物のことや、このおはなしのことがちよっぴりわかった回でした。

次回も若干説明の回です。

次回、相馬先輩がちよっただけ黒の一面を見せます！

では、また次回お会いしましょう！
格孤でした！

第8話：命の恩人（前書き）

どうも、格孤です。

投稿が1日遅れてしまいました…
すみません。少し忙しかったのです。

…今回も、宇宙生物の謎に迫ります。

では、本編をどうぞ。

第8話：命の恩人

「僕の仕事を手伝ってくれないか？」

「……………」

…これは一体…：…どういう状況だ…？なんと答えればいい？…：というか、なにを言ってるんだこの人は？

まだ会って数分も経っていないのに、いや、この人からしたら数時間なのかもしれないけど、ほぼ初対面なのに、『仕事を手伝え』…：…だ…？…？それに、宇宙生物の撃退なんて聞くからに危険そうなことを…遠慮がないにもほどがあるんじゃないか…？

私が特別なのかなんだか知らないけど、始めて会った人が特別な人間だったからって、家にまで連れてきて突然こんなことを頼むなんて、身勝手にもほどがあるだろう。

そりゃまあ確かに、怪物に襲われてて、危ないところを助けてもらったって恩があるけど、これはさすがにひどいんじゃないか！

…いやもしかしたら、宇宙生物の話も全部ウソで、私を自分ちに連れ込んでよからぬことをしようとしていただけなんじゃないか？
というか、危ないところだったっていうのも、ウソだったんじゃないか…？

そう、きつとそうだ！この人もどうせ周りの男の人と同じで、自分のことしか考えていないんだ！

ならば答えは決まってる！

「…お断り…します！」

すると意外なことに、相馬先輩は意表をつかれたような顔になった。なんだ、絶対に断られないとでも思ってたのか？

「え、…なんで？」

「えっ？いや、なんでって…宇宙生物を撃退する仕事なんてよくわからないし…。なんか危なそうだし…。…そもそも、あの生物が宇宙生物だとか、相馬先輩がそんな仕事をしてるとかってこと自体が信じられない、というか…」

…なんて…それっぽいウソについて断ろうとする。

「……………」

先輩の表情からは、先ほどまでの笑みは消えている。ただじっと私の目を見つめている。

…無表情。

何を考えてるのかわからない。

むむむ…

「…えと…助けしてくれたことに感謝はしていますが、それに関わりたいたとは思いません。すみませんが、断らせてください。」

「……………」

先輩の表情は、さっきからずっと変わっていない。

若干気まずい雰囲気になってきたので、この辺でおいとまさせてもらおうかな…。

ベッドに座ってた状態から、すっと立ち上がる。

「危ないところを助けていただき、本当にありがとうございました。」

ぺこりとおじぎをすると、先輩が背を向けているドアのほうに歩き出す。

先輩は座っているが、横を通る時少し緊張した。

そしてドアノブに手を伸ばす。

…と…

ガチッ

「…え…？」

鍵がかかっている。

特に鍵穴やそれっぽいものはないのだが、なぜかドアが開かない。

「…なんで…？…あ！」

上を見ると、ドアの一番上に、開かなくなるような仕掛けがしてあるではないか！

…いつのまにこんな…？

U字型の金具でストッパーをかけてるだけの簡単な仕掛けなのだけ
ど、

…う、くそっ！こんなとき、身長が低いことを恨む！そこまで全然
手が届かない！
と、閉じこめられた？

なぜこの先輩はこんな真似を！？

背伸びしたり、ぴよんぴよん跳ねたりしていたら、

「…ねえ、宇宙生物ってさ。」

さつきからずっとこっちに背を向けて、頭を下に垂れていた先輩が、
背を向けたままいきなり話しかけてきた。

声に抑揚がなく、先ほどまでの明るい雰囲気は一体どこへいったの
か、とてもテンションが低く、暗い声だ。

「…感情っていうものがないから、人間の『欲望』っていうものが
どういうものなのか、とっても知りたいらしいんだ。」

…なに…？またいきなり脈絡のない話を始めたな…。今度はどうい
うつもりなんだ…？

「ま『知りたい』って思うこと自体何かの感情だと思っからこの話
は矛盾してると思う。まあでも、これも人から聞いた話だから、確
かなのかはわからないけどね…。」

ん…？

話が全く読めない。私が外に出れなくて困ってるときになぜこんな
話を始める…？

「…だから…なんなんでしょう…。」

「…宇宙生物ってさ…その『欲望』ってものを求めてやってくるように、地球に集まってきてるんだって…。」

ウソじゃないかって意識しちゃったために、急に嘘っぽく思えてきたな…

「……………」

「で、地球に来て、欲望が強い人を見つけたら、その人の体に…脳に入り込むんだ。物理的にどうなってるのかわからないけど、とっても小さくなってね。」

この場面でこの話を始めた意図はわからないが、言ってることはまあわかる。

「…その人の『欲望』を知るために、ですか？」

「……………そう。ただ問題は、人間がそれに耐えられないことなんだ。脳に入り込まれて1週間も立つと、その人の欲望が『満たされる』という形ではなく、宇宙生物に『奪われる』という形で全ての『欲』がなくなってしまう。そうなると誰もが自殺に走るようになるんだ。『生きる』という欲も奪われてしまうからね。」

「…ッ…そんな…!？」

そ、そんなことが本当にあるのか？

…もし、この話が本当のことなんだったら、結構まずいんじゃない？

脳に入り込まれる？

欲望を奪われる？

科学的に言ったらなんともアバウトな話だけど、宇宙人のことなんて私にはよくわからないし、もしかしたら宇宙人ならできるのかもしれない。

「…ゆりちゃん、君は、僕に助けられなきゃ危うく宇宙生物に、脳の中に入り込まれるところだったんだよ？」

…！？

「えっ…そ、そうだったの…？」

って、いやいや…先輩のうまい口車に乗せられちゃいけない。

…これも…ウソだ。きっと…

…でも、もし…本当のことだったんだとしたら…

もしかして、あの触手みたいなのに巻きつけられたことがそうか！？

…つまり、危うく『欲』を全て奪われ、自殺に走り死んでしまうところだったと…。

「…！」

…まさか、この人…？

「気づいたみたいだね。」

ぐるりと体を回転させ、こちらに向き直る。

…そんな…たち悪いでしょ…こんな話…！

「…つまり僕は、君の命の恩人ってわけだ。」

…ああ。なんて綺麗な輝いた笑顔なんだろう…

「君は、命の恩人の僕の頼みを断るつもりかい？」

第8話：命の恩人（後書き）

第8話、読んでくださりありがとうございます。

相馬先輩は意外と黒いキャラでした。

そんなこんなで次回は、ゆりちゃんが精いっぱい先輩と戦います。
ぜひ、彼女の奮闘をご覧ください。

格孤でした。

第9話：説得方法（前書き）

どうも、格孤です。

ゆりちゃんの、はかない奮闘を見守ってやってください。

どうぞ、本編へ。

第9話：説得方法

「君は、命の恩人の僕の頼みを断るつもりかい？」

く……

そ、そんな切り札って…チートでしょっ！

「え…いや、えっと…その…」

手をひらひらと上げたり下げたりして、しどろもどろする。

ま…まさか、そんなことを言われるとは。

それを言われたら、断れないだろ…！

い、いや待てよ！でも、いくら命の恩人だと言われたところで、こ
つちがそれを否定してしまえば…

そ、そうだ！

よし、全て否定してしまおう！

一歩前に出て、拳を握りながら力説する政治家のような姿勢で、断
固否定の体制を取る。

「…あの、相馬先輩…！」

「ん？なに？」

や、やってやる…そんな頼み、絶対聞くものか！

絶対に諦めさせてやる…！

「わ、私はまず、その宇宙生物というものの自信じ…られません…。なのであなたが…命の恩人だと言われても、それ自体が信じられませんが。」

すると先輩は、またしてもニッコリと笑って、こう言った。

「…それは君が見たものが証拠なんじゃないかな？あんなものが地球に住んでいるなんて、考えられるかい？」

「う…」

瞬間、パツとあの怪物の姿が頭をよぎる。

…確かにあれを地球の生き物と考えるのには若干無理が…

………

くっ、なら…！

「もし…もし、仮に…あなたの言ってることが正しいとしても、もしかしたらあれは、命の危機だったんじゃないかって、わ、私の体を持ち上げて、ただ…えっと…え…遊ぶつもり！、だったんじゃない」残念だけど、それはないかな。宇宙生物はみんな、人の脳に入り込むときはあんな感じなんだよ。」

「うう…！？」

…いい終わらないうちに、言い返されてしまった！

え、ええ…！？どうしよう、もう打つ手が思いつかない！

…自分の手札がかなり少ないということを確認しなかったのが悪かった。最初は堂々と胸を張っていたはずなのに、今はもう小さくちぢこまってしまっていて、力強くにぎりしめていた拳も、もうふにやんふにやんと情けなく開いたり閉じたりしている。

な、なにか…なにかないか…えっと…宇宙生物は…人の欲望が気になって…地球にやってきてて…強い欲望を持った人に取り憑いて…あっ！そうか、まだこれがあった！
そうだ…これが私の最後の切り札…！

…負けるものか！

再び堂々と胸を張ると、大きな声で言い放った。

「第一、私には宇宙生物が寄って来ちゃうほどの強い欲なんてありませんよ！」

その言葉を言い終わった瞬間。

先輩が素早く立ち上がったと思ったら、一瞬で私と先輩との距離を詰め、バン！とドアに両手をつき、ドアの前に立っていた私をその両腕で閉じ込めた。

反射的に後ろに飛びのき、ドンツとドアにぶつかる。ポニーテールがふわつと前になびく。

「…え？」

一瞬、理解が追いつかなかった。

…目の前には、どアップな先輩の顔…。

どきんつと心臓が大きく脈を打つ。

って……え……？

…なんだ、このイベント……？

第9話：説得方法（後書き）

第9話、お読みくださりありがとうございます。

ゆりのちいさな奮闘でした。

次回予告：

相馬先輩！一体どうしちゃったの？

突然の急展開（苦笑）。

次回も、ぜひお読みください。
格孤でした。

第10話：おなか真っ黒（前書き）

どうも、格孤です。

一話一話が短いので、もうあつというまに10話目ですね。
しかしどうも最近、学校が始まったせいか、忙しくて書く時間が減
って…

今回は、もうバリバリ作者の願望です。
ラブコメというより、無理矢理の超展開すぎたかもしれません…
すみません。違和感がなくなるように努力はしたんですが…

…で、では、本編をどうぞ！

第10話：おなか真っ黒

今日の私が…いつも通りの私だったなら、こんなイベントなんぞ無表情でかわしていたことだろう。

「やめてください…一体なんですかいきなり。」とかなんとか言つて。

まあそれは、今まで小さい頃から何回か、変態共に同じようなことをされてきたことがあるからなんだけど…

…ところがどうして、目の前にいるのは下心丸出しの気持ち悪い変態共ではなく、それなりに顔の整った…いや、正直に言ってしまうばかりかなりモテるだろうというぐらいの美男子なのだ。

しかも、何を隠そう『男の人の怖さ』というものを誰よりも知っているだろうと自負しているこの私でさえも、

「…あれ…これ、メガネかけてもらったら結構タイプかも…？」

とかちらっとでも思ってしまうぐらいのさわやかな好青年なのである。

…まあつまり、つまり、だ。私が言いたいののは、

…私は今、私でもびっくりなほど動揺している。と、いうことだ。

「あ…ええ…？…えっと…」

こ、言葉がうまく出てこない…

…なんだろうこれ、なんで私、こんなにドキドキしてるんだ？

しかも顔がとんでもなく熱いっ…多分、耳まで真っ赤に、っていうのはこういうことをいうのだろう。

い、いつもなら平気なのにつ！

「……………」

先輩は全く無表情な様子だ。

さっきまでずっと笑顔だったのに、なんか…真剣な顔になってる。ただ私の顔を見つめてくるだけだ。

身長差が多分30cm以上あるので、私を見下ろすという感じになっている。

私はというと、逆に見上げる形でなんとなくちらつと上に顔を向ける…

「うひゃあっ！」

と、すぐそこに先輩の顔があったので、びっくりしてすぐにぱつと下に顔を戻す。

先輩は、まるで私に覆いかぶさるように上をふさいでいる…

……相馬先輩って…近くで見てもやっぱり…かっこいい…

って！危ないっ…これはまずい！

ちょ、ちょ、ちょっと待って、状況を整理しようっ！

まず私が今おかれてる状況。

ドアに寄りかかったまま、先輩に捕獲されて…

て、え？これって、普通に危ないんじゃないか？

…はたから見たら、先輩に強引に襲われそうになってる…っみたい
な…

しかもここ、先輩の部屋だし、一人暮らしらしいし…

……………なぜか閉じ込められてるし……………。

まあ確かにそれは、よく私に近づいてくる変態たちと比べたら、こ
つちの方が断然悪い気しないし…

…ていうか……………むしろ……………ここで抵抗しなければ、こんなにカッコ
いい人と……………できるかも……………なんて…

まあ、それはそれで…嬉し……………い……………？

って！

「あつ、やつ、ちょ、顔、近…っ！」

いろいろ考えてたら、突然。

ずっとなにも喋らずに微動だにもしなかった先輩が、ゆっくりと顔
を近づけてきた。

とっさに両の手のひらで先輩の体を押し返そうとするが、体格さが
ありすぎる、ビクともせず顔はどんどん近づいてくる。

「え、ちょ…あつ…！？」

あ、ああああ、ダメ！やつぱダメ！一体なにを考えてたの私は？か
っこいいから許すなんて、ただだけ軽い女なの？

なにが、『それはそれで嬉しい』だよ！

もうわたしの口と先輩の口との距離は、数cmほどしかない。顔に先輩の吐息を感じる。

「あ、先輩！ちょっと…ま、待ってくだ…さ…」

このままいくと…キ…

「~~~~~ツ!!」

こうなったらもうダメだ。冷静にもの考えるなんてことはできやしない。

目が回り、呼吸が乱れる。

だんだん、足の力が抜けていく。

緊張からか、興奮からか、恐怖からか？体が小刻みに震える。

頭からは心なし煙が出てきたような気が…

「わ、わ、あ、いや…っ！ダメ、ダメです！ちょっと…ちょっと…ま
つてっ…つて…!!」

「……………」

そう言って止まるわけがない。先輩はなにも言わず、ただゆっくりと顔を近づけてくる。

え、一体なんなの！？これは！

私なんか悪いこと言っただけ？

なんでいきなりこんなことになったの？

なんで！？さっきまで笑顔で受け答えしてくれてたのに…!!

いや今もつつすら笑ってるけども、これはさっきのとは違ってなんか…黒いし…！
なんで？なんで？なんで…

「…あ……………」

も…もあ…ダメだ…あ…

私の口と先輩の口は、もうほとんどぐっぐっついてるんじゃないかってくらい近く…

も、もう諦めるしか…

諦めて、ぎゅっと目を瞑る。

「……………！」

……………

……………

……………？

あ…あれ…？まだ…？いつになったら…

「ほら、それだよ。性欲。」

「っひゃいつ！？」

突然目の前で声を出されて、飛び上がるほど驚いて目を開けると、

目の前にはやらしい笑顔でニヤニヤと笑っている先輩の顔があった。

「わ、わあっ近づっ！は、離れてっ…くださいっ！」

「離れてっって言われても…まずゆりちゃんがこの手を離してくれないことにはどうにも…」

「…私…手……？」

言われたので確かめてみる。と…

「…わっ、わっ、わあーっ！」

急いで手を離す。

なんと、両手で先輩の体を押ししていたはずなのに、いつのまにか先輩の服をがっちりつかんでいるではないか！

…これではまるで、先輩を拒んでたのではなくてー…

「…僕のキスを受け入れてくれてたみたいだねえ…？ありがとっ…」

「~~~~っ！」

見ると先輩は、クスクスと笑っていた。

急いで先輩から離れる。

む、無意識なのか？無意識のうちに、私は先輩を受け入れちゃったのか？

「…ッ…なんなんですか、いったい！いきなりどういつつもりですかっ！」

恥ずかしさのあまり、顔から火が出そうになりながら、必死に叫んだ。

「え、だって、欲が無いだなんて言うんだもの。確かめてみただけだよ。でも残念ながらどうやら、初対面の僕にいきなりキスを迫られたのにかかわらず、無意識のうちに受け入れちゃうくらいの強い性欲があったみたいだよ。」

「……………！」

せ、せ、性欲うー？な、なんだそれ…！

っていうか、『確かめてみただけ』っていうことは、演技だったってことか！

こ、こ…この…！

イラつきと恥ずかしさと、若干の残念さでいっぱいになりながら、精一杯腕を振り回して先輩を叩いた。

「むきいいーっ…！」

「いて、いてて、あはは。あの宇宙生物はその強い性欲に惹かれてったんだね。」

うっ…

そ…そうか…なるほど…

先ほどまでの、自分の考えていたバカなことを思い出して納得する。

もしかして、ほんとに…

いやああああ！

強い性欲だなんて…！

先輩に指摘されて…恥ずかしいなんてもんじゃない！

「せつ…先輩のバカアアア…！」

先輩を叩くのを止めて、思いっきりピンと下に手を伸ばしながら叫ぶ。

…ま、まさか…ほんとに私にそんな強い欲があったのか…？

「でもまあこれで、全ての疑問が解決したでしょ？だからもう、僕の頼みを断る理由は無いはずだよな？」

「…え？」

な、なんだって？

その話をいきなりぶり返すのか？

「だから、もう一度言っよ？僕の仕事を手伝ってくれないかな？」

「……………」

こ、この人…

あんなことをしておいて、よくもしれっとそんなことを…！

全て、これをいうために、私を説得させるために…！

さっきの演技といい、この人は…！

「ん？どうしたの？」

見た目はさわやかな青年って感じだけど…

「だ…誰が…っ」

「？」

実はとってもおなか真っ黒な人だったんだっ！

「誰が…先輩なんかの手伝いなんかするもんですかーっ！」

第10話：おなか真っ黒（後書き）

第10話目、お読みくださりありがとうございます。

先輩の腹黒さに驚愕のゆりさんでした。

次回、一応普通の日常生活に戻ります。

それでは。格孤でした。

第11話：一転、平和（前書き）

どうも、お久しぶりです、格孤です。

すみません、いろいろな諸事情が重なってこんなに期間を開けてしまふことになってしまつて…

しかも忙しいなか書いていた11話、これを一度何かの手違いで完全消去してしまつて…

若干鬱になっていたのです。

さて皆様が見たいのは見苦しい言い訳でなく本文であると思うので、言い訳はここまでにしておいて、本編をどうぞ！

第11話：一転、平和

新しい学校での新しい生活が始まり、新しい高校での初めての数学の授業。

教室には、先生が黒板に中学の復習のような簡単な数式を書くカツカツという音と、それを板書する生徒のカリカリという音と、

「え〜…であるからしてここが…」

先生の、ありきたりすぎるお言葉のみが、響きわたっている。

席順は名前順なので、私、菅野ゆりはほぼ真ん中からちょっと窓際らへんの机に座っている。

…窓から外を見ると、白い鳥…あれは…ハト？いやハトではないか…の、大群が飛び去って行くのが見えた。

しばらくみると、前のみんなを追いかけるように急いで飛んで行く白い鳥が見える。

…ああ…

静かだなあ…

流石に入学したてなだけあって、クラスの誰も授業を妨害するような真似をする人はまだひとりもないみたいだ。みんな集中して授業を受けている。

ずっとこんな感じなら、先生方が悪ガキ生徒に手を焼くこともなく、平和にやってけるんだろうなあ……

……まあそんなことありえないんだけどね。

むしろ、ちょっとぐらいならそういう人がいたほうが、人間味のあ
る学校生活を遅れるってもん……

「え〜それでは……教科書の3ページの問題3番、やってみてください
い……」

……あ、また一羽遅れて飛んできた鳥が……
いや遅すぎるでしょ

あ〜、あ〜あ〜……あれはもうもはや迷子だな。
まるで私みたいだ。

いつつみんななよりも遅れていて……
必死でみんなのあとを追いかけるような。

……

急いでみんなを追いかけるその鳥は、なにか愛おしくさえ思えた。

「……はい。じゃあさっきの問題、わかる人黒板に出てかいてみてく
ださい……」

はっ、え、質問？
しかも立候補制？

「……………」

…以前として、いやむしろ、さっきよりも教室は、

…しーん……

…と、してしまっている。

…ああ…

うん。

静かだ…

いや先生…まだみんなこの新しい空間に慣れてないんだから、そんな簡単に答えられる人いるわけないじゃん…

そういうときは指名しちゃったほうが…って、あ、え？うそ…

…ひとりだけ手あげてる人いる…

「はい…じゃあ足立さん…お願いします。」

「はいっ！」

足立と呼ばれた女の子は、まるで遊園地でアトラクションに乗るために何時間も待たされて、やっと乗れるってときの子供みたいな、ニコニコした顔で、声で、大きく返事をした。

元気良く立ち上がって黒板の前まで行ったと思ったら、勢いよく黒板に文字を書き始めた。

…と同時に、クラス中から「おおー…」と言う声が聞こえる。

カッカッカッカッカ…

はあー、よく恥ずかしくないなあ…率先してそんなことして…尊敬するわ…

カッカッカッカッカ…

……ん？

あれ、私の式間違ってる？

足立さんが黒板にかいてる式と全く違うんだけど…え…ていうかあれ…

「…足立さん…」

「はい？なんでしょう？」

呆れた顔の先生に対して、足立さんはけろつとした顔で返事する。

「…それは問題2です。今は問題3を解けと行ったでしょう？」

「え、あ？ああ！え…」

一瞬の沈黙。

「あ…3番はわかりません！」

けろつとしたままの表情で、答えた。

どっとクラスから笑いが起こる。

…なぜか本人が一番大笑いしている。

…いるんだよね。クラスにひとりはこのうう人が…

教室が笑いに包まれてしまったので、先生もなにかおかしくなってきてしまったようで、笑いをこらえた表情で「静かに〜！」と、生徒を注意している。

「ははは」

人前ではあまり笑顔は見せない私も、思わず笑みがこぼれてしまった。

ああ〜…

平和だ。

…こんなに平和だと…

昨日の出来事がまるで夢か幻のように思える。

第11話：一転、平和（後書き）

前回までの意味不明な超展開から一転、いきなり学校生活です。

次回に、前回の続きを書かせていただきます。

どうぞこれからも、読んでいただければ本当に嬉しく思います…。

では…格孤でした。

第12話：素直な先輩の裏は（前書き）

どうも、格孤です。

前々回、10話の続きです。

没サブタイトル：「管野ゆりの諦め」

…では、本編をどうぞ。

第12話：素直な先輩の裏は

昨日。

あのあと、あの、先輩に意地悪なことをされたあと…

私は、まだ混乱した頭で、言いたいことを全部先輩にぶちまけた。

「なんであんな意地悪な方法を選んだんですか？」

とか、

「演技だったなんて…さっサイテーです！」

とか、

「なんで閉じ込めるんですか！早く帰らせてください！家族も心配してるだろうし…なににより、もう先輩と一緒にいたくありません！」とか…。

まあ一緒にいたくないというか、これ以上一緒にいたら恥ずかしいし、なんかいけないことになりそうな予感がしたからこう言っただけで、本当に、嫌いになっただけじゃ…ない…ん、だよ…？

まあそれはともかく、こんなに散々言いたい放題言われたのに先輩は、特に驚いた表情もせず、笑顔のままニコリと笑って、

「そうだね！じゃあ僕が家まで送ってってあげるよ！夜は危ないからね！ゆりちゃんかわいいし」

…と、言い放った。

…うん？それだけ？
え、帰してくれるの？
そんなあつさり？

いや、それよりかわいいとか言わないで…！
あんなことをされたあとに、そ、そんなこと言われたら…。

……。

そして、なんの抵抗もない様子で、扉を抑えていたストッパーをひよいと外しながら、

「あ、ゆりちゃんの自転車、駅前の置き場においてあるよね？とってきてあげるからカギ貸して！あ、ゆりちゃんはここで待っていていよ。とってきたら呼ぶから…。」

と言った。

やけに…やけに素直だった。

こんな簡単に帰してくれるんだったら、なぜ閉じ込めた？
っていうか、いままでの話はどうなったんだ？
まるでなかったかのよう…

この話はここで終わり！とでも言いたそうに…

「あ、あの…なんで…」

「ん？なんだい？ジュースもつと欲しい？それとも、お菓子でも持つてこようか？あ、ちよつと冷え込んできたね。寒くない？ひとりで大丈夫？怖くない？」

…子供かっ！

というシッコミは、ここでは控えておこう。

「大丈夫…です…。」

引きつった笑顔で答えながら、言われた通りに自転車のカギを渡す。

「えっと…じゃあ、お願いします…」

「うん。ありがとう」

そっか。じゃあ、ちょっと行ってくるね。5分以内に戻ってくるからね。じゃあ！」

…そう言って、先輩は本当に私の自転車を取りに駅まで走って行ってしまった…。

先輩がいなくなった途端、腰が抜けて、へなへなとその場で脱力する。

…もう、なんだか。

わけわかんなかった。

先輩は、本当に5分以内に、3分で戻ってきた。

あとでよく考えたら、あの場所から駅までは私の足じゃ頑張っても15分かかるんじゃないかってぐらいの距離がある気がする。

でも3分で戻ってきた…。

ってことは、全速力で走ったのかな…

寒いなか…

…私のために…？

…うーん…それは一端の女の子として考えさせられるものがあるね…

「ゆりちゃん！とってきたよ。玄関の前に置いてあるから、さ、こ
つち。」

「は…はあ…」

そのまま先輩に促されて外へ出ると、本当に私の自転車があつた。
ほ、本当に帰してくれちゃうのか…
え？いいの？

…と、素直すぎる先輩に若干不安を抱きながら乗ろうとしたら、

「はい、じゃあ僕がこぐから、ゆりちゃんは後ろに乗っていいよ！」

と、言われ…

「…はい？」

という暇もなく、

「あ、ちょっと待って、うしろに単に座っただけじゃおしり痛いよ
ね…なにか…あ、これでいいや！」

と、着ていた自分のブレザーを脱ぎ、手際良くたたんで、それを座
布団代わりに自転車の後ろにおいた。

「い、いや、いろいろよくしてもらったのにそこまで…」

と、即座に送ってもらったということを断ろうとするが、

「はい、荷物はここにのせて…わっ寒っ！風が冷たいね…寒いでしょう？僕のセーターかすよ！はい！」

華麗にスルーされ、無理やり先輩のセーターを着させられた。

「わぶっ…え、で、でも、そしたら先輩が風邪引いちゃいますよ…」
というかできればブレザーのほうがなんとなく先輩の体に密着して
る感が少ないし、いろんな意味で着やすいからいいんだけども…

「いいんだよ、子供がそんなこと気にしなくて…子供は大人の厚意
には甘えるべきだよ？もーかわいいなあゆりちゃんは」

…」

「子供じゃないです！先輩と年1コしか変わらないです！あとかわ
いいはやめてください…！かわいくないですから…！」

「ええ？かわいいよ…ちっちゃいのに敬語使ってる…！ほら、
手をパタパタさせてるところも…って、ぼくのセーター大きくてちや
んと手出てないし…」

「ちっ、ちっちやくないです…！！まだ成長期なんですよ…！ま
だまだおつきくなるんです…！」

「くくっ…そ、そうだね…っ！ふふふ…」

先輩は、ほおを若干赤らめて、口を抑えて笑をこらえている。

くっ…この人、ロリコンか…？

って、あ…いや…ロリ…て…

自分がちっちゃいって認めてるようなもんじゃ…

く、くそお〜…いつか見返してやる〜！

こんな一方的な会話が続き、いくら断ったところで先輩は一步も引き下がらなかったの、諦めて仕方なく家まで送ってもらうことにした。

というか…本音を言うと、さっきの出来事のせいでまだ腰が抜けていて、全然下半身に力が入らなかったから、送ってもらいたかったんだけどね…

道中は、特にこれと言って特別なアクシデントなどは起こらず、先輩と軽く世間話をしたぐらいで、あっという間にうちまで辿り着いた。

…道中ずっと先輩の体にしっかりと手を回してどさくさに紛れてちやっかり抱きついていたというのは、内緒の話…

ま、まあ寒かったし、しっかりと掴まってないと危ないからね！

ふ、ふふ…

うちにつくと、ごく丁寧に自転車をいつもの定位置まで運んでくれ

た。

最後まで…あの一連の出来事を抜かせば、最後までとても気の利く優しい好青年だった。

学校じゃ相当もててるんだろっなあ。

「あ、えっと、相馬先輩、ほんとにありがとうございます。」

先輩に、深々と頭を下げる。

「うん？うん。どういたしまして。気にしないで。」

やはり先輩は、ニコツと笑う。

なんで…

こんなに気持ちのいい笑顔が作れるんだろっ。

家系が執事一家とかじゃないだろうな

「気にしますよ…こんな夜中に、しかも相当冷え込んでるのに、こんな遠くまで私なんかのために送ってもらっちゃって…しかも帰りは先輩歩きじゃないですか！あの距離をもう一度帰るんですよね…」

自転車だったというのに、先輩の家から私の家までつくのに、大体20分はかかったんじゃないかってぐらい、距離があつたはずだ。

「あはは、そうだね…でも気にしないでよ、走って帰れば寒さも吹き飛んじやうしね。それとも、今夜はゆりちゃんの部屋にでも泊めてくれるかい？」

「へっ？えっ、いや！えっと、」

い、いきなりなにを言い出すかこの人は！

え、えっと…！

「…か、構いませんけど、私は…で、でも、そういうのって、なにか、ダメ、ダメだと思うと言うか…」

なんとというか…と口ごもってごにょごにょと…って、私までなにを言ってるんだ！構うだろ！

先輩は、ハハハと小さく笑って、

「冗談だよ。ほんとにかわいいね…。じゃあ、もう帰るけど、いいかな？」

先輩は、半歩後ろに下がりつつ、言った。

あ…帰っちゃ…

まだ聞きたいことが！

「あ…ちよっと…」

無意識に、帰ろうとする先輩を引き止めてしまった。が、すぐに考え直し、ぱっと両手で口を覆う。

「ん？どうしたの？」

先輩は、振り返り、ニコリと笑いかけてくる。

「あ…いや、なんでも…」

これは…聞かなくていい。
聞かない方がいい。
そんな気がした。

「あ、もしかして…」

「え…？」

先輩が、その切れ長の目をさらに細める。
え、なに？
まさか…心が読めるとか言わないよね…

「泊めてくれる気になった？覚悟決まった？」

…は？

…っ！

んな…！

「ち、違いますよ！まさか！っっていうか、一体なんの覚悟ですか！」
な、なんだよ！緊張して損した！
全くこの人は…！

「あははは、じゃあ、もうなにもないかな？」

「え…えっと…はい。大丈夫です…。」

いや、大丈夫じゃなかった。

本当は…本当は、聞きたいことがあった。
なぜあんなに私を帰すまいと拒んでいたのに、突然こんなに素直に家に帰してくれたのが知りたかった。
けど、あの話をぶりかえすのが嫌だった。
せつかく先輩の信用が戻ってきた矢先、その答えによってまたその信用を失ってしまうようになることが怖かった。

……。

「本当に、ありがとうございました。同じ学校ですから、もしかしたらまた会うこともあるかもしれませんね。その時は、またよろしくお願いします。」

まあ…でも、これで多分当分お別れだろうし、学校であった時にもう一度お礼とかを言って…

「え？うん。でも、どうせまた近いうちにまた会うことになるよ。」

「……………え？」

え？え？

なにその確証…？

なんで？また何か企んでるの？

そう考えてから先輩の笑顔をみたら、気のせいか、なんとなく黒いものを感じた。

や…やめて…

やだ…やだよ。

これ以上先輩の信用を失いたくないよ…

「どういう…意味…ですか…？」

聞きたくなかったけど、どうしても聞いてしまう。
すると先輩は、こつ答えた。

「え？まだこつちの手札はいくつか残ってるって意味。」

さらっと言い切った。

こつちが思っていることなど、我関せずな顔で。

…手札…

「今日はひとまず帰してあげるけど、まだ僕は、ゆりちゃんのこと諦めてないからね、ってこと！それじゃ、また明日ね！」

笑顔で言い切った。

そして、こつちに手を降りながら、先輩は走り去っていった。

なるほど…なぜあそこまで素直に私を帰してくれたのか、理由が今わかった。

つまり、『命の恩人である』という、最大の切り札だと思いこんでいた手札以外にも、私を説得させる切り札はまだ先輩の手中に残っていたのだ…！

たたた…つと、先輩が駆け足で去って行く足音が、薄暗い道路に響く。

「……はあ〜」

…どうやら、どうしても先輩は、私の憧れの先輩、っていうポジションには残ってくれそうにもないみたいだ。

って、え？

明日!?

なんで？

教室に乗り込んでくるとか、校門で待ってるとかはやめてほしいんだけど…
恥ずかしいし…

いやあの人ならやりかねない。

もう一度、はあ…と大きく溜息をつき…ふと、下をみる。
と…

「あぁっ！」

私が今着ているこのセーター。
これ……

「先輩のじゃん！」

第12話：素直な先輩の裏は（後書き）

第12話、お読みくださりありがとうございます。

はたして、ゆりちゃんは先輩に惚れているのか？

嫌いなのか？

気になってるだけなのか？

…ご想像にお任せします。

では次回、また平和な学校生活に戻ります。

しかし、さすがのゆりちゃんもスルーしがたいアクシデントが…

どうか、13話もよろしくお願い致します。

格孤でした。

第13話：昼休み（前書き）

どうも、格孤です。

もはやここまでくると、言い訳はしません。

とても遅れてしまい、申し訳ありませんでした。

これからも、このような感じでごくちよく投稿することになるとは思いますが、これからもよろしく願います。

では、本編へどうぞ。

第13話：昼休み

キーンコーンカーンコーン…

授業終了のチャイムが、静かだった教室に鳴り響いた。

高校入学して始めての数学の授業は、特にこれといって変わったところもなく、まあ普通すぎるほど普通の授業だった。足立さんの奇行を除けば。

さてまあ、昼休みに入ったことだし、このまま何の行動を起こさずにただ机に座ってポケーっとしてるってのもあれなので、お弁当でも食べようか。

クラスメイトのみんなは、どうやら結構様々な中学からきてるらしく、前からの友達がクラスにいる、って人は少ないみたいだ。

ほとんどのみんなは一人寂しく、自分の机の上に弁当を広げてもくもくと食べている。

まあ私も、その中の一人に入るんだけども…

いや、なんて静かなお昼休み。

こんな中、ざわざわなんて擬音が使えろ人がいたとしたらその人は20kHz以上の音波が聞こえてしまっているのだろう。

すぐにアメリカか何処かの大学の研究所か何かの実験のサンプルに

立候補しに行くことを勧める。

人類の科学の発達につながる事が発見されるはずだ。

いやしかし…うーん最初なんてこんなものなのかな。

やけに静かに感じる。

中学の頃もこんな感じだったのか…覚えてないや。

いや中学の頃は給食だったんだっけ…

まったく、時が経つのは早いものだね…

「かーんつのさんっ！」

「はいっ!?!」

と、突然肩をつかまれた。

飛び上がってビックリしたため箸で口に運んでいた卵焼きを、ぽろぽろと落としてしまった。

机の上に。助かった…?

「な、なんですか?」

一応手で口を抑えつつ、食べてたものを早く飲み込んでしまおうと、口をもごもごさせながら振り返る。

とそこには、

「いや〜ごめんごめん、驚かせちゃった?」

二カニカした笑顔の、足立さんが立っていた。

数学の時間の奇行の張本人。

私の若干の尊敬の対象（悪い意味で）。

「あ、足立さん…?」

「え、管野さんなんで私の名前知ってんの?もしかしてエスパー?」

「え?いや、違…」

「それはあなたがさっきみんなの前で馬鹿やってたからでしょ…?それに昨日自己紹介したし…」

「ああ〜そつかあ〜さすが美与ちゃん!」

足立さんの後ろから、美与…と呼ばれる女の子が現れた。

この人は…髪型は、足立さんのいかにも元気そうなショート型の髪と違って、黒髪セミロングで、毛先が綺麗に切り揃っている。どこかのご令嬢みたいな人だ。まさに『綺麗』の具現化のような。

「えつと…なんの用ですか?」

「なんのようつて…一緒にご飯食べよう〜ってただだよ?」

足立さんが、キョトンとした顔をして答える。

え?ご飯?

「ご飯…ですか…?」

「ごめんね、管野さん…いやだったら、別にいいの。迷惑かな…。」

美与さんが残念そうな顔つきになる。

……美人。

いやいやいやそうじゃない。

そうじゃないだろ！

「いえ！いやじゃないです！全然！迷惑でもありません！」

なぜか必死に否定する。

「ほんと？ありがとうございます……。」

ニコリと笑いかけてくる。

う……美人！

「え……えっと……椅子、これ、どうぞ……！」

立ち上がってじぶんの椅子を二人に差し出す。
ん？

……いや……二人で一つの椅子に座れというつもりか？私は……

「え？い、いいいいいよ！それ使っちゃかんのさんが座れないじゃん！」

「え……でも。」

「そうそう……いいのよ。菅野さんは座ってて。私たちが勝手に押しかけてきたんだから。」

「でも……それじゃ二人は……？」

「うん？私らは、じぶんの椅子持ってくるし！」

「ちょっと待ってて、ありがとね。」

ああ、そうか。

そりゃそうか。

バカ丸出しか私は。

第13話：昼休み（後書き）

13話、お読みくださりありがとうございます。

今回はおそらく今までで一番普通に普通な回でした。

次回、『まさかの目撃者』です。

あの非現実的事件現場に居合わせた人が先輩以外にも…！？

次回もよろしくお願いします。

では、格孤でした。

第14話：まさかの目撃者（前書き）

どうも、格孤です。

ゆりちゃんたちはただいま絶賛昼休みでわいわい（？）中です。
やっど若干物語に関係してきました。

早速本編へどうぞです。

第14話：まさかの目撃者

椅子を持ってきた二人は、一つの私の机に所狭しと各々の弁当を広げ、黙々と食べ始めた。

「んん〜いや、それにしても、アレだねっ！かんのさん！」

いや、黙々とではないか。

「え？なんですか？」

お茶を飲みつつ、聞き返す。

「かんのさん、背超ちっちゃいね！」

「ふぶっ…！っ…！」

予想外の発言に、飲んでいたお茶を吹き出す。

いきなり…：気にしてるところをついてきたな足立さん！
私のお茶返せ！

「大丈夫？」

美代さんが、ハンカチを差し出してきた。

「あ、ありがとうございます…」

「あははははっ！おもしろい！いまの吹き出し方漫画みたい！おもしろかったよ！あはははは！」

「伊空…まったく、あなたって…」

美代さんが、飽きたような顔でつぶやく。

ところで、足立さんの名前は伊空っていうんだね。珍しい名前だ…。

「あははは！ごめん、ごめんよっ！…っ！」

…といいつつも、足立さんはなおもお腹を抱えて笑い続けている。

…とりあえず、反論しとこう。

「そ、そんなに笑うほどちっちゃくないですよね？」

きよとん。

一秒間を置いて、

「ははははははは！」

再び笑いだした。

「ちっちゃいよ！いや、ほんと！私がいままでみてきた高校生の中で、一番ちっちゃいよ！」

「そ、そんなんっ…？」

それはちよっとおおげさすぎじゃなかるっか！

「だって、ほかに私ぐらいの身長の子なんていっぱい…！」

「いないよ！いない！高校生だよ？あははは！だって今ゆりちゃん身長何センチぐらいよ？」

「い、言いません！」

「ええ〜なんで〜？えっと、私が今大体155とかそんなぐらいで、ゆりちゃんが私よりも20センチぐらいちっちゃいから〜…大体130？ちっちゃいつ！きゃあかわいいつ！」

ひ、ひゃくさんじゅう？

「そ、そんなにちいさくありませんよっ！」

「ちっちゃちっちゃ！あははは！ゆりちゃんおもしろいね！」

そっちが勝手におもしろがってるだけだろ…！
っていうのは言わずに伏せておこつ。

「か、からかわないでください！それに、140はありますから！
…多分…」

いや、どうだろうか…？
いやっ！あるはずだ。

140なかったら、さすがに小学生中学生ぐらいだし…

すると足立さんはなにを思ったか、突然私のほっぺたをつねって、
きゅーっと引つ張り始めた。

「はっっ…ひゃだちさんっ!?!」

「あはははっ!ふにふにー!小学生みたい!ははは!しかも、なんでだろうね!このちっちゃいお顔の異常な可憐さ!」

「ふあふあふや…」

一通り私のほっぺをこねこね撫で回したあと、何を思ったか!いきなり抱きついてきた!

「わっっっ!…って危なっ!」

抱きついた反動で机にぶつかつたため、上においてあった水筒が倒れそうにグラグラしていた。

が間一髪で抱きつかれたまま手をのばしてキャッチ。

「もお〜かわいすぎるよ〜ゆりちゃん!ぎゅーっしていい?」

「い…いや、もうされてるんですけど…」

ふわっ…と、いいにおいがする。

今私に抱きついてる足立さんも、それなりに整った顔立ちをしているのだから、けっこもてるのではないだろうか?

かわいい子にかわいいって言われると、なんか、なんだろう。複雑な気持ちになるよ。

「もう、伊空!そろそろやめなさい!」

「はは、ごめんごめん、かわいすぎて、つい!」

美代さんの一喝で、ぱつ、と、足立さんは私から離れる。
た、たすかった、ありがとう美代さん…

「ふう…」

全く、つい、じゃないよ…

改めて、再びお茶を飲み始める。

まったく…元気のいい子だなあ…

「あ、そういえば、ねえねえふたりとも、」

おっと、早いな。

もう次の話か。

話題が尽きない子だ。

「先輩なんだけど、2年生の相馬先輩って知ってる？苗字だけで名前までは知らないんだけどさ！」

「ふうほう！？」

「菅野さん！？」

…こ、これこそ予想の斜め上、お茶を吹き出す以外のどんなりア
クションがとれようか。

この子は、私にお茶を飲ませてはくれないのか？

…まさか、ここでいきなり先輩の名前があがるなんて…
完全に油断してたよ。

さつきよりも盛大に吹き出したせいか、美代さんがまた別のハンカチを差し出してくる。

って何枚常備してるんだこの娘…？

「だ、大丈夫？菅野さん…わ、私は知らないけど…誰？菅野さん知ってるの？知り合い？」

「あ、ありがとう…えっと、知り合いというか…」

命の恩人だったりして。

「え？なにに、ゆりちゃん知ってるの？」

「え、えっと…」

二人が、というか主に足立さんの方が、詰め寄って聞いてくる。

これは…多分言わないほうがいいよね。

というか、言っても無駄な気がするし…

どうせ信じてもらえやしない。

まあそれはそうだ。

宇宙人だもの。

当事者の被害者である私でさえ最初は信じられなかったんだから…
ってか、今も信じてないけど。

「なにになに？どうしたの、ゆりちゃん？知ってるの？」

何秒か考えを巡らせていた私を見て、足立さんが痺れを切らして聞いてくる。

「あ、え？いえ、しらないです！なにとも知りません！誰でしょうか、その人？」

「な、なんだなんだ？あからさまに怪しいけど…？」

「私も、知らないわ。男の人？誰？有名なの？」

「男だよ！有名有名！二人ともやっぱり知らないんだ！」

「やっぱりって？」

「だって二人ともそういうに興味なさそうな顔してるもの！なんちって」

ぬ…

失礼な。

なんだそれ、いささか不愉快だな！

まあ興味ないけど

「人は見かけで判断しちゃダメなのよ？」

「そつかそつか。じゃあ美代ちゃんは興味あるのね！」

「いいえ？あまりそついうのは」

笑顔でさらっと言い放った。

「なんだい…やっぱないんじゃない？えーっと、あのね！相馬先輩っていうのはね！」

お、おいちよっと

なんだ？私には聞かないのか？

つまり私は聞かなくても、興味ないだろうってことがわかるような顔でもしてるのか？

悔しいような嬉しいような…

そのあとの、身振り手振り感想交えた足立さんの熱演説は、諸事情により割愛させてもらいたい。

とりあえず、要点をまとめていうところだ。

足立さんの話によると、先輩はこの学校ではかなり有名らしい。

その一つの理由として、先輩は昨年この学校に入学してきたときから、生徒会に入って、いろいろと生徒のために頑張っているらしい。

なにか行事があるたび、司会を受け持つて、場を盛り上げたりしているため、生徒からはもちろん、先生方からも人気があるようだ。

先生方から気に入られている理由がもう一つある。

それが、理由の二つ目…。

なんととってもその才能だ。

足立さんの話によれば、どうやら完璧にできない教科はないらしい。勉強ができるのは言わずもがな、

運動をさせたらトップの成績は間違いなし。

絵を描かせたら先生も驚く作品を作り上げ、歌を歌わせれば超一流、楽器の扱いも教えればすぐにマスターするらしい。

流石にそれは言い過ぎだとは思うが…

理由の三つ目は、その面倒見のよさと愛想の良さだ。

後輩の面倒見のよさは度を超えているらしい。

後輩だけじゃなく、誰にとっても同じなようだが、頼まれたことは必ず最期までやり通す。

しかも、完璧完全、むしろやる必要もなかったようなおせっかいじみたことまでやってしまうらしい。

それで頼みごとをした方が大助かりになっていることは間違いがないから、おせっかいとも言えないようだ…。

それって、人もいいよな…。

愛想がいいのは、昨日身をもって体験したから、わかる。

なんととっても理由の四つ目、その完璧な容姿だ。

女子からみても、悔しいくらいにかっこ良く、

悔しいくらいに美しく、

悔しいくらいに素敵なのだ。

それも、昨日身をもって体験した。

ニコニコしてて、いかにも愛想良さそうだった顔から、突然きりりとシリアスな顔つきになったり、どきつとするような甘い表情に変わったりするのだ。

男子にそこまで興味ない私から見てもそうだったのだから、普通の女の子にとってはきつとたまらないんだろう。

…と、まあ、これらが才色兼備で文武両道で、他にも完璧超人を表す言葉があったらそれらすべて総占めにしてしまいそうなそんな完璧な先輩の話だったか…

さ、さすがにここまですごいか…？

そんな訳ないじゃん…

そんな完璧超人なんて現実にはいないって…。

「んね！すごいでしょ！」

「た、確かにすごいとは思いますが…」

「それ本当なの？伊空の妄想が混じっちゃったんじゃないか？」

「ち、違うよ！まあ、確かに私も人から聞いた話だから、本当かどうかは知らないけど…」

「…でも、それが全部本当のことなら、とんでもなくすごい先輩なんじゃない？」

「でしょ！もし本当だったら、まさに漫画か小説の世界のキャラみたいだよ！まさに欠点がないっていうか…！」

欠点がない？

いや…あると思うよ…

みんなしらないんだ…

先輩学校じゃ隠してるんだな？

あの腹黒さを…

お、思い出しただけで鳥肌が…

「ああーかつこよかつたわ〜」

ん、過去形？

「え？よかったって…会ったことあるんですか？」

「それ！そうそう、聞いてくれる？それが話したかったの！いい質問です〜！」

「はあ…」

「なに、会ったことあるの？」

「うん！あのね！昨日だったかなあ？学校が終わってすぐに、駅まで自転車を取りに歩いてたんだ！」

昨日？

ああ…それじゃあ、もしかして私と同じかなあ…
もしかして、私昨日足立さん見たかな…？

「そしたら、突然後ろからものすごいスピードで私の横を走り去って行った人がいたの！」

「…それが、その相馬先輩だったの？」

「そう！もう、突風かと思ったよ、それほど本当にすごい早さだったんだ！」

「あら、突風なんて難しい言葉、よく知ってたわね…。」

「え？」

いや美代さん…そんなに本気で驚いたみたいなお表情で言われても…
足立さんってそんなにバカなの？

「しかも驚いたのは、そんなすごいスピードなのに、先輩は全く汗かいてない感じで、澄ました顔で、綺麗な走り方で、ただだ〜っ！
って感じよりも、スーッと！」

足立さんは、全く気にしてないようだ…

…足立さん…

「それで？もしかして、走り方が綺麗でかつこ良かった、で終わり
じゃないよね？」

「え、違うよ！こっからだよ！えっとね、見たらすぐ曲がり角曲
がっちゃってね、そのあとすぐはなにがあったかわかんないんだけ
ど、すぐに追いかけて見てみたら、なんと！」

「なんと…？」

「聞いて驚かないですよ！あのね…」

数秒溜め、

「道路脇の歩道は戦争でもあったかのように潰れてベキベキになっ
ていて、その前で悠然と先輩が佇んでいたの！しかも、その手には
子供を抱っこされていて…」

「…え？」

何だその図？

さすがにそれを信じるというのには無理が…

ちらつと横を見ると、美代さんも同じく「え？」という顔をしている。

「それでね！」

そんな私たち二人なんて意にも介さず、話を続ける。

「道路の真ん中で仁王立ちして、子供をお姫様抱っこで抱えていて、肩で息をして、周りを見回していたの。まるで、見えない何かを目で追うように。」

「み、見えない何か…？」

いやいや…：そこまできちゃったら、さすがに足立さんの妄想もしくは夢…

あれ？待って…

昨日？

学校が終わってすぐ…

駅前の自転車置き場に向かう途中の道で…？

「しかも、驚くべきことにね！先輩がいきなり上を向いたと思ったら、さつと後ろに飛びのいたの！その瞬間、先輩が今までいたところに、見えない何か重いものが落ちてきたように、ドーンって！大きい音がして、道路がへこんだの！なんだと思う？これ。」

「……………」

私の脳裏には、昨日の先輩との会話がエンドレスリピートしていた。

『宇宙生物ってというのは、僕たちが普段暮らしている世界には視覚化されていないんだ。それを見る事ができる才能を持った人は、世界中を見渡しても少ししかないらしい…』

「よくわからないけど、それだけ聞くと、その先輩と見えない何かとの間に、漫画みたいな戦闘みたいなのがあったみたいね…？」

「でしょ！私も、それをみたとき思ったね！先輩は、実は何か超能力を持っていて、日々世界を守るために、悪の組織と戦っているんだってね！」

「…まあそれが演技だったら、ちょっとイタい人だけだね。でもすごいね…それは…」

「……………」

それは…

そのシーンは…まさか…

「ん？どうしたの、ゆりちゃん？そんなに驚いた？あ、これ嘘じゃないからね！本当に昨日あったんだからね！」

「…あ……………」

道路脇の歩道が潰れていて…

見えない何かと戦っているように先輩が…子供を抱えて…

子供…

「え、その、先輩が抱えていた子供っていうのは…？どんな…」

「ああ、あの子ね！結構背ちっちゃかったから、服装は先輩に隠れて見えなかったけど、多分小中学生ぐらいじゃないかな…多分、襲われてたその子を、先輩が間一髪のところを助けたのよ！ああ、かつこい〜！」

「背が…ちいさかった？のですか？」

「え？うん…まさに、ゆりちゃんぐらいの…って、ずいぶんその子にこだわるんだね？まさか、あれゆりちゃんだったり？」

「え？いや、そんなまさか！」

軽く笑い飛ばした。

結構見事な嘘つきっぷりだったと思う。

「そっか。そりゃそうだよねえ〜いやあ〜すごかったなあ…なんか、映画の世界に入っちゃったみたいだった。先輩かつこ良かったなあ…あんなエキサイティングな先輩学校じゃ見られないよね〜！いやあ得した得した！」

「ははは…」

レベルマックスの愛想笑いをふりとばしながら、私の頭にはある答えが浮かんでいた。

なんて、言わなくなったってわかるだろうけどね。

昨日足立さんが目撃したその子供…

まったく、思い当たる節、とはまさに言い得て妙だ。

それがまさか私だったとはね。

第14話：まさかの目撃者（後書き）

第14話お読みくださりありがとうございます。

え〜つまり、ゆりちゃんは小さいということですね。

ちなみに身長はひゃくs「やめてえええーっ！！！！」「ぐほあっ

……………???

い、今ゆりちゃんに殴られたような気が…

気、気のせいかしら…

あ、と、とりあえず、次回は「流れる旋律」です。

では、格孤でしたっ！

第15話：流れる旋律（前書き）

どうも、格孤です。

前回のあらすじ。

昼休み、ゆりちゃんは足立さん、美代さんと一緒にご飯を食べていたところ、足立さんから奇妙な話を聞く。

しかしなんとそれは、昨日ゆりちゃんが体験した出来事だった…

今回もまた、超展開です。

では、本編へ！

第15話：流れる旋律

まさか、昨日のあの出来事をみていた人がいたとは！
いや、でもおかしくはないか。

あのときは動揺してそんなこと考えなかったけど、よく考えたら
あそこは普通に街中だし、目撃者がいたことの方が必然で自然だ。

しかし、私だっただけでなく不幸中の幸い…

「それで？そのあとどうなったの？」

美代さんが先を促す。

本当だったらやめてほしいところだけど、ここで無理に会話を終了
させても妙に勘ぐられるだけだ。

「お、やっぱり気になる？私も、気になってそのあとずっと見てたん
だけど…」

美代さんが、ゴクリと息を飲み込む。

「つて、おいおい…すっかりはまっちゃってんじゃん…
かんべんしてよ…」

「なんかそれ以来先輩は空中を見つめたまま動かなくなって…最後
諦めたように肩を落として、その子を抱えたままどこか歩いて行っ
たの。気になるから、隠れたままついて行っただけ…」

おいストーカー。

「駅からだいぶ離れたとこまで歩いていくと、ある一軒家で立ち止まって、中に入って行ったの。その後こっそり家の表札見たら相馬で書いてあったから、間違いない！あれが先輩の家だ！住所ゲッツ！」

お、おいストーカー！

「え？じゃあその子供も一緒に家の中に入って行っちゃったんですか？」

この質問をしたのは私だ。

状況を知らない人からしてみれば、ごもつともな質問だったと思う。

嘘つきスキルを活かせる職業にでも就職するかな…

思い当たるところ詐欺師しか思い浮かばないけど。

「うん。そういえばそうだったね。でもあのあとどうなったのかまではわからないな…」

「へえ…最後はあっけないけど、それは確かにすごい体験だったね…」

後ろにのけぞりながら、美代さんがつぶやいた。

弁当を食べる箸はさつきからちつとも進んでいない。

「でしょでしょ！学校で人気の先輩の意外な一面を見れたのだ！もゝあそこで相馬先輩は、私の憧れの先輩第一位にランクイ…」

「いやそうじゃなくて、その戦闘みたいなのシーンのことよ。それ本

当？道路が潰れたりって…」

「え、うん本当だよ！もうあっちこっちがひしゃげてて…あ、放課後良かったら見に行く？」

「ええ、ぜひ見たいよね。というか、なんでそんなことがあったのになにも事件とかにならないのかしら…？」

「た、確かに…」

言われてみればそうだ。

今まで気がつかなかったのが不思議なくらい。

あそこまでの被害が出たんなら、それなりに世間がなんらかの対応をすると思うけど…

未だそんな情報は聞かない。

「た、確かに…それは気になるね。ゆりちゃんは？行く？」

「え、えっと…？」

「伊空が見たつていう、その騒動の現場によ！」

いやもちろん行きたいさ。

興味本位でもあるし、好奇心からでもあるが、自分が受けた被害の大きさを確認しておきたいっていうのもあるし。

…でもなにか行かない方がいいような気がした。

なんらかの手がかりによって私が関わっていることがバレてしまう

…なんてことがないだろうか？

しかし私が行かなかったところでバレないなんてことはないだろうし、バレる運命ならば私が行こうが行かなかるうがどっちにせよ同じことだ。

こうなったら選択肢は一つに一つ。

「は、はい…行きます！」

『みなさん、こんにちは。』

…答えると同時に、教室内に放送の音声が響き渡った。

「えっ…」

『新入生の皆さんは始めてですね。昼休みの校内放送です！』

「昼休みの校内放送？こんなのあるんだ。」

「え？伊空の中学はなかったの？」

「うーん…あつたかなあ…」

…ってわからないのかよ…

3年間かよつてた学校のはずだよね？

この放送、明るい声の、元気そうな女の子がしゃべっている。

『今日は、新入生の皆さんの中にも知ってる方は多いと思いますので、先生方にも、生徒たちにも人気の高い、相馬正人副生徒会長を、

ゲストとしてお呼びしましたあ〜っ!』

『どうも、皆さんこんにちは。』

「…え?」

一瞬学校内が静まり返ったのもつかの間、次の瞬間、学校中から生徒たちの叫び声が聞こえてきた。

「きゃああー!」

「せんぱーい!」

「かつこい〜!」

だとかの女子の黄色い声援や…

「はははは!」

「相馬〜!」

「頑張れよ〜!」

だとかの、男子たちの笑い声も聞こえてくる。

…男子にも人気あるのか…?

つて、副生徒会長!?

そ、そんなにえらい人だったの?

あ、わわわ…

『ははは…皆さんの声が放送室まで聞こえてきますよ。すごいですね。ありがとうございます。』

黄色い声援を送ってるのは、私の目の前の足立さんも、例外では

ない。

「ね、ね！先輩だよ！噂をすればなんとやらだね！すごいね！」

「そ、そうだね…」

先輩だ…

昨日、私に犯罪未遂のことをした。

相馬先輩だ…

わ…わ…

「あれれ〜？どしたのゆりちゃん？お顔がまっかつかかでしゅよ〜？」

「ふえ…？」

顔が赤い？

顔が…熱い…

自分の顔をペタペタ触ってみる。

赤い…

う…

「うわあ〜っ！な、な、なんでえっ！？」

「なにになに？ゆりちゃん実は先輩のこと好きだったりして？」

「そ、そ、そんなことないよっ！ない…ですよっ！なんで？なんで

…！」

「あはは、無理に敬語使わなくてもいいのに。かわいーなあ」

な、なんでこんな赤くなってるの!?

昨日のこと思い出しちゃったから?

あ、あれは、忘れなきゃ! 忘れた方がいいんだ!

いつのまにか、教室のみんなの顔が、放送が流れるスピーカーに向いている。

『いや、それにしても今日は寒いですね…相馬副生徒会長…』

『ははは。そうですねえ…僕も今日はセーターがなくて、朝寒い中登校してきたんですよ。』

セーター…?

って、あ、あ!

そうだ、私が持つてるんだっけ!

そうだ、そうそう、一応、もしも会ったときのために洗濯して持ってきたんだっけど…

それは、わ、悪いことしたなあ…

でもこんなに人気なんじゃ、二人きりであったときにセーター返すなんて、できそうにないなあ…

周りの人になにか勘ぐられるに決まってるし…

どうしよ…

『え? セーターがないって、それはどうして? 洗濯中ですか?』

『いやいや、実は、人に貸してるんですよ。』

うっ…？

『貸してるとは！いやはや、先輩がお人好しだっていう噂は本当な
んですねえ〜。で、誰に貸したんですか？』

途端、全身の毛が逆立った。

一瞬で、全身が硬直した。

えっ…ちよ、ちよ、ちよっとまって。

それ聞いちゃうの？

え、い、言わないよね、先輩？

まさか、全校生徒の前でそんなこと言ったら…

『いえ、それは言えませんよ。言ったら借りた子がかわいそうです
からね。』

心の底からほっとした。

だって先輩だから。

さっきのあの生徒たちからの声援、あれがあったせいで、きつと
興味がない人でもみんな、この放送に耳を傾けているだろう。

つまり、そのことをバラされるということは学校全体に知れ渡ると
いうことで…

ああ…よかった。

さすが先輩！

まさかこれ以上は聞かないよね…
諦めてよ放送してる人！お願い！

しかし、その願いは、次の相馬先輩の発言で見事に打ち砕かれた。

『この学校に入ったばかりの女の子がそんなことのせいで嫌な目にあったら、かわいそうだからね。』

………は？

瞬間、いろいろなところから、叫び声が響いた。

それは、うちのクラスも例外ではなく、さっきまで物静かにご飯を食べていた子達も、「ええー！」だとか、叫んでいる。

うるさすぎて誰がなにを言っているかわからない。

そんな中、私だけは、放送が流れるスピーカーを見つめたままぽかんと間抜けに口を開けて突っ立っていた。

う、ウソでしょ…？

第15話：流れる旋律（後書き）

15話、お読みくださりありがとうございます。

かっこいいサブタイトルの割に、しょぼい内容でした。

次回、ゆりちゃんは、全校生徒の皆さんに相馬先輩との関係を知られてしまうのか！？

って、そういえば関係って言っても、知られるとしたらセーターを貸してもらったことだけの気が…

ま、まあ！その辺は相馬先輩がそれほど人気すぎるってことで、大目に見てやってください！

では、格孤でしたっ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3142w/>

欲求フマンはテキである!?

2011年11月20日18時47分発行